

# 「ふるさとに新しい港をつくりたい」

## 伏木港を開いた功労者

藤井 能三



### 町のため、ふるさとのため

藤井能三さんが、19歳になったときのことです。「これから、お前に家の仕事を任せようと思う。この能登屋の商売は、たくさんのお金のおかげで、うまくいっているのだ。だから、もうけたお金は一人じめせず、地域の人のために役立てるように、心がけてくれ」

能三さんは、先祖代々営んできた回船問屋の仕事を、お父さんから任せられたのです。

お父さんの三右衛門さんは商人として仕事に取り組みながら、一方では、自分のお金で波よけ工事に取り組むなど、地域のために力を惜しまなかった人でした。

そんな父の姿を見て育った能三さんは、力強く答えました。

「私は、できるかぎりの努力をして、きつと町のた

現在の伏木港のにぎわいは、藤井能三さんが、港を開いて近代化させることに力を注いだおかげだよ。

明治の初めごろのお話ですね。



現在の伏木港の様子。

神戸の港は、何と大きいのだろう…。それに、これからは蒸気船の時代だ！伏木港も大型船が入港できるようにしないと、時代の流れから取り残されてしまう。よし、私とその仕事に取り組もう！

西暦	年齢	
1846年		伏木村に生まれる
1865年	19歳	父・三右衛門から家の仕事を受けつぐ
1873年	27歳	伏木小学校を開く
1875年	29歳	伏木港に汽船を入港させるために、東京へお願いに行き 2せきの汽船が入港する
1877年	31歳	洋式灯台が完成する
1878年	32歳	伏木港築港を県に願い出る
1881年	35歳	伏木に船会社をおこす
1891年	45歳	「伏木築港論」を書く
1900年	54歳	庄川改修工事、伏木港築港工事が始まる
1913年	66歳	亡くなる 10月 伏木港築港工事完成祝賀会が開かれる

藤井能三さんの三十二年表

町の人たちは、工事の完成祝賀会をいっしょに喜ぶことができないことを、とても残念に思ったそうです。

能三さんは、伏木港工事が終わった翌年に亡くなったのだよ。



め、ふるさとのためにつくします。どうぞ「安心ください」

### 神戸で見たおどろきの光景

「ああ、世の中はどんどん変わっているんだ！」  
仕事で神戸に来た能三さんは、神戸港に蒸気船が走り、たくさんの物資でにぎわう様子を目にして、おどろきの声を上げました。

能三さんの胸に、ある思い出がよみがえってきました。

およそ10年前、12歳のときのこと。  
能三さんは、伏木沖に煙をあげて走る船（汽船）を初めて見たのです。強くて速そうな西洋船（ロシアの軍艦）でした。当時、日本で使われていた船は、北前船と呼ばれる一枚帆の和船だったので、大型の西洋船を見て、能三さんは本当におどろいたのでした。

今、目の前の神戸港は、あのとき見たような西洋船でいっぱいです。

この神戸のにぎわいに比べて、ふるさと  
の伏木港はどうだろう。

能三さんは、伏木の港を思いうかべ、大きなショックを受けました。

「和船しか入れない伏木の港は、新しい世の中の動きから取り残されてしまう。何とかしなければ…」

この日から、能三さんは「伏木港を整備して、立派な港にする」という大きな目標に向かって、人生を歩み始めたのでした。



木造で高さ11.5m、白色で六角形。外国人の設計による日本海側初の西洋式灯台。工事の費用は全部、能三さんが支払いました。



大正のころの伏木港。和船（帆のついている船）に混じって、蒸気船が見られます。

日本海側の玄関である伏木港には、たくさんの船が入り出しているね。



### 伏木港に汽船を呼びたい

ところが、村の人たちは、能三さんの話をまったく聞いてくれません。

「そうだ。村の人たちに、もつといるんなことを知ってもらおう。新しい時代に生きていく子どもを育てよう。よし、まず伏木での学校づくりだ！」



高岡市立伏木小学校の校庭にたつ能三さんの銅像。  
運動場に能三さん。  
港や町見て立っている  
いつも前見て立っている  
やさしい目をして立っている  
(小学校で歌われている  
「運動場に能三さん」の歌)



伏木港に入港したロシア船。ロシアのほかに、中国や韓国の船なども伏木港を訪れます。

こうして、能三さんは学校づくりの準備を始め、自分の家を教室にして学校を開きました。地域の発展を考え、自分のお金をおしみなく使って努力する能三さんの姿に、人々の考えも少しずつ変わっていききました。

次に、能三さんは、東京の大きな船会社の社長である岩崎弥太郎という人に会いに行きました。

「伏木港を航路に加えて、あなたの会社の汽船を伏木に回してください」

「伏木のような小さな村には、積み込む荷物など少ないだろうから、とても無理だと思う。だが、もし次のような条件なら、船を回してもいいだろう」

「その条件とは、何ですか」

「一つは、積み込む荷物をすぐに集めること。二つ目は、荷物が船の半分にならなかつたら、運賃を弁済しようすること。三つ目は、すぐに灯台を建てることだ」

それは、とても難しい条件でした。

しかし、能三さんはこの条件を受け入れました。どんなことだって、最初からあきらめるわけにはいかない。

能三さんは、さっそく伏木に帰り、荷物集めと灯台づくりのためにかけまわりました。

その結果、とうとう2せきの西洋型汽船が伏木港に入港したのです。約束の灯台は、まだ完成していませんでしたが、能三さんの熱意に感心した岩崎さんが、船を回してくれたのです。

伏木港には、たくさんの方が集まり、驚きと喜びの声をあげました。

「これで北陸の米をいつでも他の地方に送れる。伏

木の港もにぎやかになるだろう」  
能三さんは苦勞も忘れ、願いがかなった喜びいっぱい船の入港を見守りました。

## 日本と世界を結ぶ港にしたい

汽船が伏木港に入港し、航路が開かれた後も、能三さんの夢はまだまだ終わりませんでした。

「大きな船が岸に横づけできるように、港を掘り下げ、岸をしつかり築く工事をしたい」

能三さんは、国や県に何度も何度も築港工事を願いました。しかし、願いはなかなか取り上げられませんでした。

その間に、能三さんは、経済の急な変化のため、家や土地などすべての財産を失ってしまいました。それでも、能三さんは少しもくじけず、伏木港の工事を願いつづけてきました。

「日本からヨーロッパに行くには、伏木港からロシアのウラジオストクへ船で渡って、シベリア鉄道を通るほうが近道である。ヨーロッパの国々と貿易をさかんにし、世界と日本を結ぶ役目をする新しい港



この白灯台は、1999年に開港百周年を記念して、藤井能三さんの建てた西洋式灯台を再現したものです。



**能三さんの学校**：能三さんが作った学校（現在の高岡市立伏木小学校）は、ほかの寺子屋と違い、理科の時間に地球儀を使ったり、英語まで教えたりしたそうです。また、船によわないように、校庭のブランコで練習したそうです。

子どもの感想

未来を考える

能三さんは、みんなのことや未来のことを考えて、人生のほとんどを費やした。意見をなかなか分かってもらえなかったり、反対されたり、財産を失ったりしても、能三さんはあきらめなかった。新しい時代にむけて、港をよくしたいという強い気持ちがあったから、最後までがんばれたのだと思う。私は、能三さんの願いをしっかりと受けつぎ、伏木港が世界とつながる港になったらいいなと思った。  
(高岡市立伏木小学校6年 柳澤顕恵さん)



伏木小学校のお友達が、能三さんのことにくわしい古岡英明さんにインタビューしました。



について調を、紙芝居長しました。伏木小学校 顕恵さん、華さん、岩ん、本元裕



、外国のられます。ている立

を、ぜひ伏木に造るべきだ」  
能三さんは、地域のことを思い、新しい時代に合う近代的な港の建設を夢見ていたのです。能三さんの熱意はだんだん人々に伝わり、ようやく伏木港開港について協力してくれるようになり始めました。  
こうして、伏木港は開港場(外国と貿易できる港)として、一人前の港とみとめられることとなり、大がかりな築港工事が始められました。そして、伏木港は、3000トン級の大型汽船がらくらくと横ついでできる近代的な港になったのです。  
能三さんが築港の願いを出してから、すでに35年もの年月が流れていました。  
能三さんは、自分の一生をかけて、伏木に近代的で立派な港を築いたのでした。

小矢部川河口には工業地帯が造られ、伏木の町は、港と工場の町として発展してきたんだよ。

は、えらいなあ。



現在、伏木港は、「環日本海交流の拠点」として大型船が入港できるよう外港計画が進められています。能三さんの夢は、今も受けつがれているのです。

海外との貿易には港も大切ですが、大型汽船を用意したり、航路を開いたりすることも必要です。次のページでは、中国との間に、新しく航路を開いた南嶋間作さんを紹介しします。